

日時 令和2年7月29日(水) 4校時
授業場 美術室

生徒 1年A組 男子16名 女子15名 計31名
授業者 更科 結希

1. 題材名 (教科書関連ページ P12 なぜか気になる情景)

身近な情景に潜むカメレオン

2. 題材の目標

- (1) 造形的な視点で情景を捉えることができ、発想・構想したことを基に、材料や用具の特性を生かし、意図に応じて表現を工夫して表すことができるようにする。
- (2) 気になる情景の全体と部分の視点で構想を練り、美術に対する見方や感じ方を広げたりすることができるようにする。
- (3) 主題を追求し、創意工夫を重ねながら創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を培う。

3. 評価規準

知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知	造形的な特徴となる対象の全体や部分などで捉える視点について理解している。	発 身近な景色から気になる情景を発見して主題を生み出し、カメレオンを置く場所を選択するにあたり、全体と部分の視点で情景を捉え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。	美術の創造活動の喜びを味わい楽しく、身近な情景の中で、形や色の変化がある場所を基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする表現の学習活動に取り組もうとしている。
技	アクリル絵具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。		

4. 題材のデザイン (全4時間)

時	○学習活動 ・ 学習内容	手立て	評価の観点		
			知	思	態
1 (本時)	○身近な情景のどこに、カメレオンを隠すか決める。 ・ 全体と部分の両方の視点を持ち、情景を捉える ・ 形があることによって色分けされている箇所を見つけづらいことに着目し、情景を探す	II 造形的な視点に着目させるための資料を複数用意し、「なぜ、こちらの資料の方が見つけにくいのか」という問いから、本時に活用する視点の共有化を図る。			
2	○形や色の特徴に合わせて、環境の色に近接する色をつくり、カメレオンに着色する。 ・ 近付きたい色の混色する順番などを考える ・ 時間帯によって異なる色の違いについて考える	I 身近な情景を造形的な視点を理解するために、カメレオンの着色で隠す学習課題を設定する。その情景の中で最もカメレオンが隠れやすい場所を形や色の効果を踏まえて決定し、色の混色によってその効果を高めながら課題解決する学習過程とする。	○		○
3		II 造形的な視点に着目させるために、資料を2つ用意し、「こちらの混色の方が最適な理由」という問いかけ、本時に活用する視点の共有化を図る。	○	○	
4	○他の人の気になる情景を探す ・ 形や色の変化とカメレオンの存在を総合的にとらえ、他者の表現について鑑賞する		○		○

5. 本時の展開 (1 / 4)

(1) 本時の目標

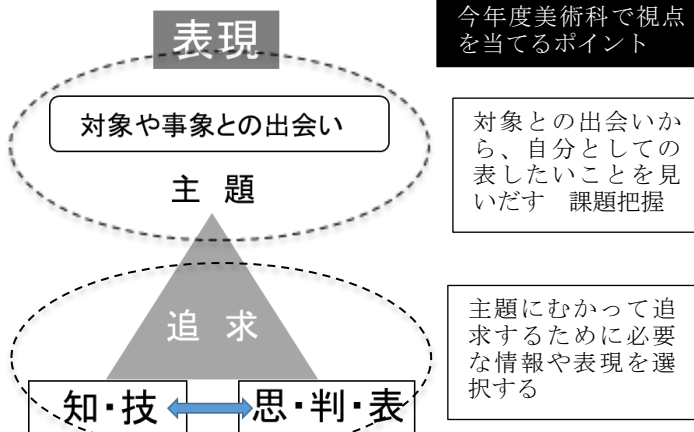
身近な情景にカメレオンを潜ませるために、どのような場所が最適であるかを探し、形や色の特徴を見いだしながら、主題生成し構想を練る。

(2) 本時の展開

学習活動 「児童・生徒の姿」 ○教師の働きかけ・発問、△補助発問、□指示・説明	【評価の観点】 ◇評価の内容 ・指導上の留意点
<p style="text-align: right;">手立て</p> <p>1 学習課題を把握する。</p> <p>□学校にはこんな場所があります</p> <p>○みなさんが「附中らしいな」「いいな」と身近に感じる景色はどこですか。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">1年生の廊下 玄関の靴箱 階段を見上げたところ</p> <p>□この学校の中で、みなさんが「附中らしいな、いいな」と思う場所を見つけて、カメレオンを潜ませてみて下さい。</p> <p>○どこかに、カメレオンが潜んでいるキミは見つけられるかな。</p>  <p>○どちらが見つけにくいだろうか (比較) II</p> <p>○なぜ見つけにくいのだろう</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">色が似ているから 文字が被さっているから 形に目がいくから</p> <p>△カメレオンの形に目がいかないようにするためには、どうしたらいいかな。</p> <p>○今回の学習で大切なことはなんだろうか。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">色を近づけていくこと 形に目がいくように良い場所を選ぶこと 身近な景色を選ぶこと</p> <p>2 自己の課題設定(主題生成)をする。</p> <p>□校内の最適な場所を見つけて、ズームアウト・ズームインの視点で撮影みよう。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;">校内探索</p> <p>3 自己の課題(主題)の造形的な視点について振り返る</p> <p>○みなさんが撮影してきた場所は、それぞれどのような形や色の特徴がありましたか</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">近づいてみて、ポスターなどが掲示されていて、色の違いがあった。 掲示板の文字の形と色の違いについて着目した。</p> <p>□次の授業から、実際にカメレオン着色を始めてみよう。</p>	<p>・校内風景の様子をスライドで示し、イメージを持たせる</p> <p>・単色のカメレオンと複数色のカメレオンを準備し、比較する</p> <p>【共通事項】</p> <p>・形に目がいくから、見つけにくい。色合いが近いから見つけにくいに着目させる</p> <p>・クロッキーへの記入</p> <p>◇形や色彩などの効果や全体や部分に着目して捉えることを理解しようとしている。【知】</p> <p>・zoomにつないで状況を把握しながら、随時声かけをしていく。</p>  <p>◇表現の工夫について考えようとしたりする意欲や態度を見取る 【態表】</p> <p>・ロイロノートにズームイン・アウトの撮影資料を提出</p> 

■本時で目指す児童・生徒の姿

今日の授業における「問題解決力」を高めるためのポイント



本時におけるポイント

これまで生活してきた校内の様子を見渡し、気になる情景の中にある形や色の変化に気付かせる。そのために、カメレオンに着色し景色に潜ませることによって、校内の景色を具体的に見ることへつなげる **I** (次ページ中美研究の視点①に関連)

主体的な主題生成と主題追求の場面で活用する造形的な視点の理解と、自己としての課題となるよう、資料を用いて造形的な視点に着目させる問いを投げかけ共有していく。 **II** (次ページ中美研究の視点②—2に関連)

■本時における学び合いのポイント

今日の授業における Ls/Fs が発揮され、学びが深まる「学び合い」にするための手立ての具体

本時は、LF-ship を発揮し主題追求していくために、必要となる個人の主題生成の場面となる。この段階では、LもFも明確には存在しない課題把握の受け身の状態から、今後 LF-ship を発揮していくための、主体的な学びを促進させていく場面となる。

対象や事象との出会いから主題を生み出す（主題生成）ために、自分としての視点を見いだしやすい要素を取り入れた題材構成～ **I** (次ページ中美研究の視点①に関連)

課題把握から主題生成に向けた流れの中で、造形的な視点で課題を捉えることが、自己の学びの主体性を促進していけるよう構成する。「～を描く」や「～をつくる」ために生み出す主題ではなく、生徒自身の気付きの中に生まれる主題となるよう、これまで扱っていた学習課題を複数組み合わせた題材構成とする。

造形的な視点を用いて最適な表現や考えに気付かせる工夫～ **II** (次ページ中美研究の視点②—2に関連)

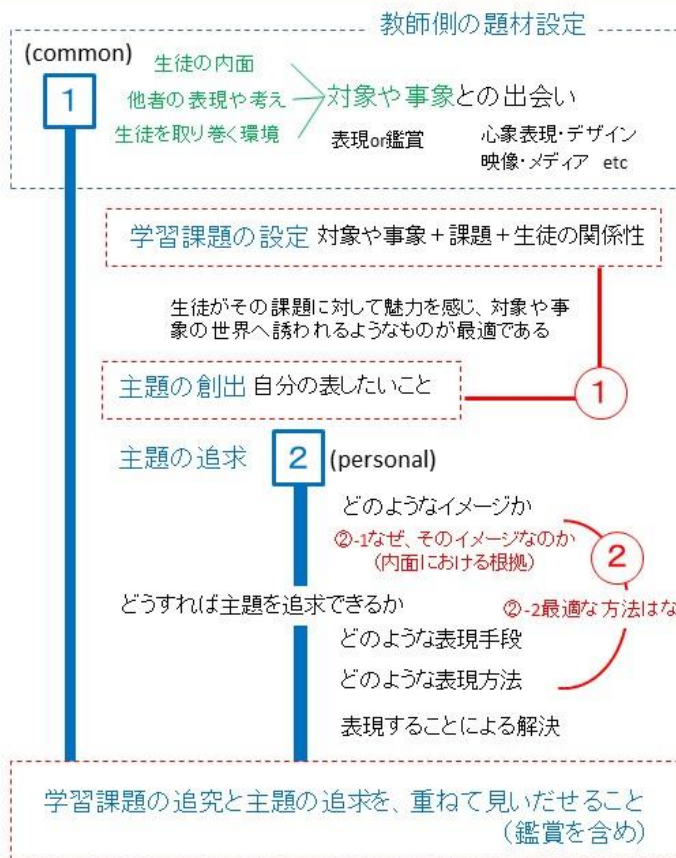
対象との出会いから造形的な視点に気付かせるために、資料を2点用意した。

- 黒板に潜んだカメレオンAは、同一色によってかかっているもの（これまでの授業ではこれのみを扱っていた）
- カメレオンBは、複数色によって潜んでいるもの

これら2つを比較してどちらが見つけにくいのかについて考えていく。

- ・同一色による理由
- ・形によって色別される場所は、色の変化の方へ注意は引きつけられることによる理由

上記の造形的な視点を持ち、気になる情景から見いだすことが、より主題生成における自己としての理由を深めていくことにつながると考える。これは、その後の主題追求場面における重要な視点となる。



「表現の学習は、表したいことをもとに『知識・技能』と、『思考力・判断力・表現力等』を相互に働かせながら、問題解決をする学習そのもの」と言われている。生徒は自分の表現したいこと(=主題)を生み出した後、その実現に向かい、様々な道具や方法を見つけながら表現していく。それは一つの解ではなく、ただ自分の中にあるイメージに近い複数の解の中から最適解を選んでいる行為に他ならない。

美術科の授業を振り返り、問題解決のプロセスが2通りあると考えている。一つは授業として教師・生徒が共同体として展開していくcommon的なもの。もう一つは、生徒が主題を創出した後のpersonal的なものである。

50期生の実態調査の結果から(4段階評価 平均値)

- ①学習口は何らかのねらいがあり、その学習によさがあることを強く感じている
H30.4/3.59 R1.4/3.61 R2.4/3.71
- ②授業の内容が他の教科や生活につながることを実感できた
H30.4/3.39 R1.4/3.74 R2.4/3.78
- ③授業で学んだことを、更に追求したり、発展的な内容に挑戦しようとしたことがある
H30.4/3.22 R1.4/3.38 R2.4/3.39
- ④美術の学習でこんなことだと思っていたが、みごとにこつがえされた。
H30.4/2.74 R1.4/3.14 R2.4/3.2

①や②は、学年進行で数値の上昇が顕著に見られるが、③・④に関しては、ここ数年どの期においても同様の傾向が見られる。その理由としては、生徒のpersonalな主題追求の場面において、生徒が持つイメージによって、personalな見解は揺らぎ、自己の考えを見直す機会を与えるのではないかと考える。一つの解を求めず、personalな最適解を導いていく過程において、次の2つの手立てを講じる。

R2年度の手立て

問題解決における学習プロセスの中で、他者との関わりは既にその必要性については確認できている。他者の意見がpersonalな主題において必要ないという意見も美術教育界では散見されるが、他者の意見によって、personalな見解は揺らぎ、自己の考えを見直す機会を与えるのではないかと考える。一つの解を求めず、personalな最適解を導いていく過程において、次の2つの手立てを講じる。

- ①学習課題が主題の創出に関わる制限を加えつつ、その制限の中で十分表したいことを創出できる内容を検討し、表現を終了した段階で、当初取り上げた課題とその結果を重ね見いだせることを全体共有の場で行う。
- ②-1 生徒個人内での主題の意味やイメージを制作過程の中で厚み(根拠)を持たせるための問いかけ
- ②-2 最適な方法を選択する場面での批判的思考を促す問いかけ

学習課題の追究と主題の追求を、重ねて見いだせること (鑑賞を含め)

「正解のある問いに答える」学びから「正解のない問いに答える」学びへ

多くの課題から一つ選んでも「自らの問い」とはならない。課題とその解決方などの知識を学ぶ中で、従来の常識から逸脱したものに気付くとき、「自らの問い」が生まれる。「正解のある問いに答える」学びを経て知識を獲得した上で、ようやく「自らの問いを立てることができる」日本教育新聞5、18不易流行より

美術における「自らの問い」は、主題の生成に該当する。では、主題はどのように生成されるのか。これまで、学習課題の範疇内での主題の生成は行われてきた。以前取り組んだ「Answer Art」では、作品を鑑賞し、その作品に対して返答するという課題サイズとした。その際は、返答の内容も方法も手法も異なり、課題と主題が近接した状態を維持したまま授業を展開することができ、授業の最終場面では、鑑賞作品に返答することができたと捉えた生徒が殆どであった。「〜つくる」という課題ではなく「思考の転換」を図る課題にすることにより、生徒の主題生成は課題に近接しながらも、「自らの問い」として成立していくのではないかと考える。

